

【姫路市立広畑第二幼稚園】の取組

1 テーマ

伝え合う喜びを味わう幼児の育成

2 テーマ設定の理由

近年、幼児を取り巻く環境の変化が激しく、未来が見えにくい状況である。また、子育ての価値観の多様化により、人との関わりが希薄になっている。本園の幼児においても、自分の思いを言葉で上手く表現できにくかったり、相手の思いを聞き入れようとしなかったりする姿が見られる。自分なりの言葉で表現し、伝え合う喜びを味わうことが、一人一人の生活を豊かにし、人との関わりを深めていくことにつながっていくと考える。

心を動かす体験活動とは、どのような活動なのか、また幼稚園教育要領で示されている「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で幼児の育ちや学びを具体的に捉え小学校教育へどのようにつなげるのか、さらに幼児の発達段階にふさわしい指導であるか評価し検証していきたいと考えた。

3 研究経過

(1) 1 年次（平成 29 年度）の取組

－心を動かす体験を通して－

教師の援助や環境の構成について考える。

- ① 生活や遊びの中で、思わずつぶやく言葉や言葉にならない動作などを記録する。
 - ・教師は、タイミングを逃さず共感したり、一緒に考えたり、適切な援助が必要である。
 - ・感動が大きいと学びも大きくなり誰かに伝えたいくなる。ねらいをもち意図した環境の構成が大切である。
- ② 心揺さぶるような感動体験について考える。
 - ・一人一人の幼児に対する理解を深める。
 - ・友達との共通体験よりイメージを共有し、言葉を交わしながら遊びを発展させる。
 - ・教師が仲立ちをすることで幼児同士、より理解し合える関係となる。
 - ・絵本や紙芝居などの文化財に親しみ、言葉の美しさや面白さに気付く。

- ・絵本の紹介タイムを通して『話す・聞く』機会となり、表現力が豊かになる。

(2) 2 年次（平成 30 年度）の取組

－小学校教育への

滑らかな接続を目指して－

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を視点として、小学校教育へ学びの連続性を検証する。

- ① 幼小連携年間計画を作成し実践する。
 - ・具体的なねらいをもって実践することで、幼小互いの指導方法や内容を理解する。
 - ・連携後に双方の教諭で振り返りを行うことで、何が育ちどのような学びがあったのか捉える。
 - ・分析、評価することで、学びの連続性を明確にする。
- ② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」について、小学校教諭と共通理解を図る。
 - ・言葉の育ちに関して、「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」から学びの姿の分類をする。
 - ・アプローチ期に身に付けたい資質・能力をまとめる。

○事例 『ひろにっこパークで遊ぼう』

乗車遠足で行った姫路セントラルパークでの体験から動物や乗り物をつくり、ひろにっこパークが完成した。隣接する小学校 1 年生と交流し、それぞれの学びを分析し、つながりを明確にした。

幼児（接続期前期）	1 年生（接続期後期）
・遊びの中で必要な言葉「いらっしやいませ」「ありがとう」に気付き伝える。 ・自分のイメージしたことや考えたことを相手に分かるように話そうとしている。 ・他者の意見を聞くことで、自分の気付かなかったことを意識し考えている。	・相手が伝えようとしていることを聞き理解する。 ・自ら話し掛けることでより遊びが楽しくなることに気付く。 ・気になることやもっと知りたいことを質問したり考えを伝えたりする。

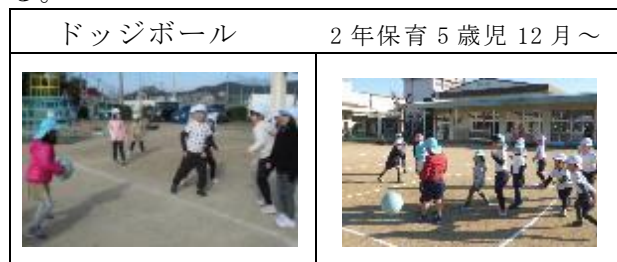
(3) 3 年次（令和元年度）の取組

－「幼児期の終わりまでに育って

ほしい姿」を踏まえた評価－

遊びや生活の写真、保育実践の記録から読み取れることを取り上げて評価し、次の保育

に向けてのカリキュラムマネジメントを進める。



- ① 写真から読み取れることを話し合う。
 - ・友達と一緒にボールを使って体を動かして遊ぶことを楽しんでいる。
 - ・楽しく遊ぶためにはルールが必要なことに気づき、ルールを守って遊んでいる。
 - ・ボールや友達の動きを見ながら、予測して動いている。
 - ・どこに投げるか、誰をねらうかなど考えている。
- ② 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた評価をする。
 - ・ボールを投げる、受ける、逃げるなど機敏に体を動かす。(健康)
 - ・諦めずに最後まで頑張る。(自立性)
 - ・同じチームの友達と声を掛け合う。(協同性・言葉)
 - ・ルールを守る。(道徳性)
 - ・相手やボールの動きを予測する。(思考力)
 - ・作戦を考える。(協同性・思考力・言葉)
 - ・どちらのチームが多く残っているか、人数を数えて勝敗を決める(数量)
- ③ 次の保育の改善につなげるカリキュラムマネジメントを進める。
 - ・幼児の捉え方には教師それぞれ違いがあり、教師間で話し合うことで、自分自身の保育の在り方を振り返る機会となり、指導の方向を探ることになる。
 - ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて学びを整理していくことで、どの項目が足りていないのか、次にどのような保育内容を計画していけば総合的な遊びとなっていくのかが明らかになる。

4 3年間の研究を終えて

(1) 成果

3年間、鳴門教育大学附属幼稚園佐々木晃園長に指導を受けてきた。

幼児は感動体験を積み重ねることで、その感動を教師や友達に伝え合うようになる。また、絵本や物語などに親しみながらイメージをふくらませ、言葉に対する感覚を育ていくことが分かった。幼児の発達段階や興味関心に適した環境の構成や教師の援助が大切であることを再認識した。

互惠性のある幼小連携を計画し実践することで、互いの指導方法や内容を理解した。そして、連携後に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」で示されている具体的な姿を通して小学校教諭と振り返ることで、学びの連続性について話し合うことができた。

職員間でも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点から学びを分析することで、幼児を多面的に理解し具体的な育ちを捉えることができたり、教師の一方的な取組になっていないか検証することで指導の改善に結び付けられたりした。

(2) 課題

幼児が豊かな言葉を育み、言葉による伝え合いを楽しむようになるために、これからも教師がモデルとなって意識して関わったり、幼児の発達に適した援助や環境の構成について研修を深めたりして取り組んでいきたい。

幼稚園と小学校が互いの専門性を生かし、相互理解を深めながら連携を図ったり、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の視点で学びを可視化し発信したりして幼稚園教育の理解を広めていきたい。

5 参考文献

- ・幼児理解に基づいた評価 文部科学省
- ・幼児教育じほう 2018.9
- ・新編あたらしいこくご